

近世初期日本図の作成について

—越中国からの検討

深井 甚三

(2002年10月20日受理)

On The preparation of Japanese Figure in an early period of Edo era
—Examination from Ettyu

Jinzo FUKAI

E-mail: fukai@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：日本図 初期日本図 江戸幕府 絵図 越中

Key words : Japanese figure, early period Japanese figure, Edo shogunate, Ettyu

はじめに

川村博忠氏による国絵図研究にともなう日本総図の研究を契機にして、初期日本図についての研究が活発化した。川村氏は、幕府作成の官撰日本図には慶長日本図と正保日本図の間に、二つの寛永日本図があることを明らかにし、国会図書館蔵日本図（以下、国会図書館図と表記）は寛永16年改訂の日本図であり、佐賀県立図書館蔵日本図（蓮池藩鍋島家旧蔵、佐賀県立図と表記）が寛永10年に家光政権発足時に作成された国土掌握の総仕上げ的日本図であるという新見解を提出した⁽¹⁾。川村説に対して黒田日出男氏の批判や塚本桂大氏の批判が行われているが⁽²⁾、とりわけ近年は海野一隆氏による重要な川村批判がなされ⁽³⁾、川村氏も反論したものの⁽⁴⁾それは十分なものとはいえず、これに対して海野氏によりさらに批判が行われているのが現状である⁽⁵⁾。

この一連の論争により、初期日本図について川村氏により明らかにされた、次の点が間違いのないことが確実になった。それは、第一に寛永期に日本惣図の編纂が幕府により実施されたことが正

しいこと、第二に佐賀県立図は寛永10年の国絵図と広域図を材料にして作成された幕府作成の日本図の原図をもとにした図であること、第三に国会図書館図は慶長ではなく、後の寛永15年以降に描画された日本総図であることである。

当然にこの重要な業績を上げられた川村氏にも不十分な点はある。それは川村氏の場合、この国会図書館図の原図についての検討が十分でなかったことで、これに対して、海野氏は原図が慶長3年（1558）から同6年に成立したとの見解を示した⁽⁶⁾。川村氏はこの批判に反論したものの⁽⁷⁾、自ら記しているように専ら徳川政権の日本図作成に目を向けていることと、海野氏が批判したように、氏の記載事項についての検討が城所在地にほぼ限定されている点の問題がある。なお、海野氏は幕府による寛永15年の日本図作成の取組みは認めるが、結局この時に正式な日本図作成は実現せず、正保の国絵図・日本図作成となったこと、そしてこの時に応急処置として豊臣期の日本図を利用した絵図が作成され、これが国会図書館図であるとの説を出されている⁽⁸⁾。

なお、先の塚本氏や海道静香氏は、諸種の初期

の日本図を図形と記載内容から検討している。塚本氏は前記点から初期日本図に三系統を見だし、最も古いのが松平定信が旧蔵していた南波家蔵日本図屏風の系統図（第3系統）であり、佐賀県立図書館図もこれに含まれるとする。国会図書館蔵日本図などの同系統絵図（第1系統）は島原の乱以降に作成されたが、原拠の国絵図は不明で、残りの家光枕図屏風系（第2系統）は承応頃からの作成とする⁽⁹⁾。海道氏は、国会図書館図と関係のある現存する山本氏蔵日本図屏風図・下郷氏所蔵日本図などほかの慶長日本図系諸図は国会図書館蔵図以外にも参考とした絵図があること、肥前国に島嶼名が多いのは島原の乱よりは文禄・慶長の役との関連を想定させると指摘しているが⁽¹⁰⁾、これらの図は塚本氏の分類で第2系統とされる図であり、海道氏の指摘がもし正しければこれも原図が豊臣期にまで遡ることになる。

本稿では、これらの3系統あるとされる図のうち代表的な絵図をそれぞれ取り上げることにする。ここでは川村氏が特に着目した国会図書館図と佐賀県立図書館図を主にして取り上げたいが、前者は塚本氏のいう第1系統図、後者が第3系統図となる。残りの第2系統図は下郷氏所蔵日本図・秋岡氏旧蔵日本図⁽¹¹⁾を対象に、この際に第3系統図の南波氏所蔵日本図も一緒に取り上げて初期日本図の作成について検討してみたい。

検討に当たっては、越中の図形と地名を見ることになる。地名の場合は、これまで城所として記載された地名が検討の主となっていたが、海野氏の指摘にあるように⁽¹²⁾、城以外の地名記載も含めて全国に及んで検討する余地があるし、また海道氏は慶長日本図系諸図にて誤記地名の点から試みていた。しかし、全国の地名総点検は容易ではない。このため初期の地理に変化のあった地域を対象にして検討するのがとりあえず有効な方法となる。そこで、この原図成立を考える上で重要な記載を持つ、筆者が居住する越中国について取り上げることが有効なのである。越中は、初期の城下町変更や、そのための中心街道交替があり、初期日本図の作成年代判定の参考となる地域である。もちろん、この国会図書館図だけではなく、佐賀県立図書館図などの初期日本図も含めてこの両国

の記載について調べ、この初期日本図の成立について考えてみたい。

これまで国会図書館図・佐賀県立図書館図は幕府撰日本図ないしその写と考えられてきたが、念のために越中についても見てみる必要はある。そのため幕府へ提出された国絵図や広域図と対照する必要があるが、初期北陸道の図を見ることができなかったので、ここでは国絵図の検討にしたい。また、これにあわせて国会図書館図、慶長日本図をもとにしたとされている「日本分形図」⁽¹³⁾が本当に同図をもとにしているかも念のため越中について検討してみたい。なお、初期国絵図の詳しい検討は先に行っているので⁽¹⁴⁾、本稿ではそれを踏まえて取り上げるが、残存する初期の越中国絵図には内容が簡略されたものがあるなど、越中ではその検討にも限界があることを断っておきたい。

一、日本総図の検討

1、国会図書館蔵日本図

国会図書館蔵日本図（370センチ・433センチ）は、慶長（後に寛永）幕府撰日本図とされてきた、日本図の代表的な絵図である。幕府による慶長の日本図とされたのは、かつての国立上野図書館に収蔵された大型で美麗、かつ立派な日本図であり、徳川期以前の日本図にはみられない格段にすぐれた姿を描いていることからである⁽¹⁵⁾。しかし、前述のように同図は、記載内容から寛永後期の作成とする見解が出されている。

この絵図は貴重な絵図だけに現物を見られないが、その写真が入手可能であり、これにもとづいて検討する。この写真などをもとに、初期日本図の越中の図形を次頁の図に示した。

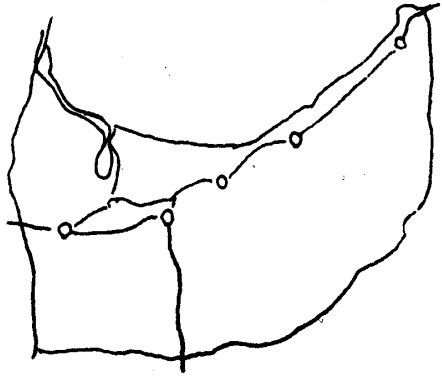
図アに見るように、この日本図には十二町瀉（元は布施瀉の呼称、現氷見市）が描かれているものの、越中最大の瀉である放生津瀉が省かれている重大な特徴がある。これは後に検討する越中慶長系国絵図の大きな特徴である。

次に越中の記載都市を街道ごとに記載すると、次のように記している。

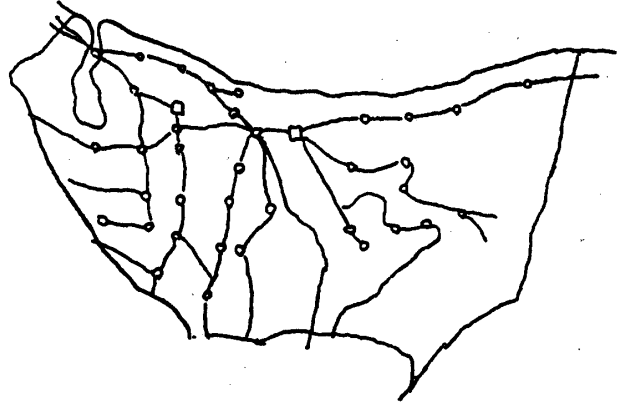
○(金沢－森山)－今石動－守山－(能登)

○「いまゆき」(今石動)－「黒河」－「戸山」－「魚津」－

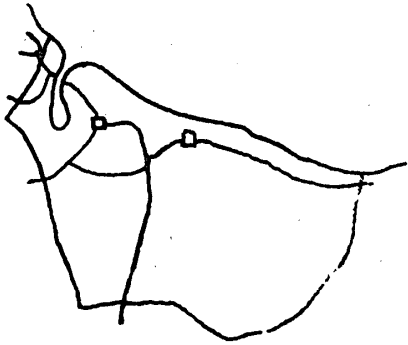
図、初期日本図の越中の図形



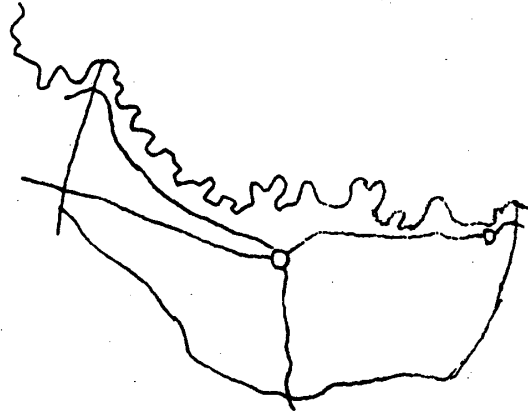
図ア、国会図書館所蔵日本図



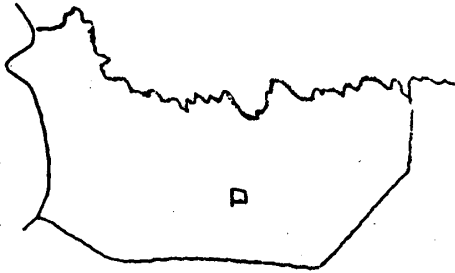
図イ、佐賀県立図書館所蔵日本図(蓮池文庫)



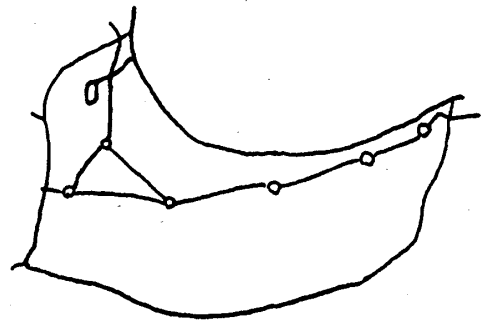
図ウ、南波氏所蔵日本図



図エ、下郷氏所蔵日本図



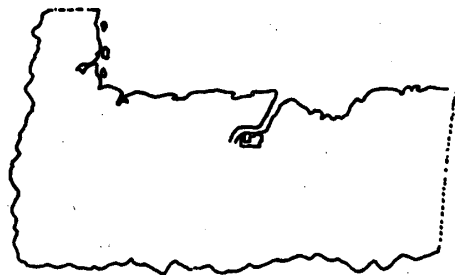
図オ、秋岡氏所蔵日本図



図カ、「日本分形図」



図キ、内閣文庫蔵「越中国図」



図ク、南英文庫蔵「越中国図」

「境町」－(越後)

○守山－富山

○「黒河」－(高山)

絵図には城下町に□の記号が記載されるが、上の越中の町にはいずれも城下町記号がない。加賀藩の城下町は金沢であり、富山藩が成立するのは寛永16年(1639)であった⁽¹⁶⁾。また、日本図の関係上、藩主の居城する城下町だけに城下町記号を付していたのであり、富山のように富山藩成立以前に城下町として幕府に認められていても、藩主以外が居城する町は城下町記号は付けられなかったと見ることができる。このため川村氏のように富山藩成立前の寛永10年代の状況を記したものと見することもできる。

しかし、重要なのは寛永期に存在した越中の重要都市である高岡の記載がこの絵図にはないことである。この日本図では高岡が記載されずに、代わりに守山が記されている。守山から富山や今石動の道が描かれた街道筋からすると、絵図は高岡がまだ建設されていない時期の越中を描いていることになる。富山城に隠居していた前田利長が慶長14年(1609)の大火により火災に弱い富山を越中の本拠地にすることをやめて、新たに関野の地に新城下町高岡を同年より建設したのである⁽¹⁷⁾。そうすると絵図は、慶長14年をさかのぼる時期の作成ということになる。

守山が城下町として建設されたのは、天正13年(1585)に秀吉から前田利長へ越中川西地域が与えられた際であった⁽¹⁸⁾。このとき利長は中世以来の重要な山城の守山城を拠点として城下町建設を実施したのである⁽¹⁹⁾。また、今石動は、天正13年の地震により木船城が崩壊したために、翌年に建設された城下町であった⁽²⁰⁾。

魚津は前期には小津とも記載するが⁽²¹⁾、中世以来の町で、魚津城はこの中世後期には存在していた。境町は越後との境にある町で、古くから越後へ通ずる北陸道はこの土地を通った要所であり、境関所が設置された町である。

富山の町は「戸山」と記載されているが、富山は元は外山郷と記載されたこともあり⁽²²⁾。近世初期には富山や外山でなく、戸山の記載なのは単なる誤字か、あるいは作成された時代にまだ富山

の記載が定着していなかったことの表れである。

描写された街道についてみると、金沢－今石動－黒河－富山の街道が近世初期の北陸街道である。寛文初年に今石動－高岡－小杉新町(明暦4年町建設)⁽²³⁾－富山の街道が北陸街道に変更されている。今石動－守山から能登への道も、元和2年(1616)に宿役の定めが出された際に⁽²⁴⁾、北陸街道などとともに宿役が設定されていた越中の重要街道であった。

絵図で注目される街道は、黒河から高山へいたる飛騨街道である。富山から高山ではなく、黒河から飛騨街道が描かれているのは、飛騨への物資運送ルートとして岩瀬から神通川を利用して富山へいたり、富山から神通川沿いに飛騨へ抜ける飛騨街道の重要性がこの当時に大きなものではなかったからであろうか。

佐々成政の富山城下建設の詳しいことは不明であるが、彼が越中を領有した際に、城下町建設を行ったことは柴田勝家の北庄建設、前田利家の所口建設からも間違いない。もちろん、上杉と対峙する前線の地であっただけに、富山の城郭整備はともかく、城下建設については限界があったようで、このために慶長10年の利長による富山の再建⁽²⁵⁾が行われる必要があったのである。

この再建以降に富山からの飛騨街道は一段と重要になったと考えられるが、それ以前は黒河も水運との関わりで重要であったとみられる。すなわち、中世の越中の代表的都市は守護所も設けられた湊町放生津で、ここには元将軍足利義材も身を寄せていた⁽²⁶⁾。放生津に加え、三津七湊に数えられた岩瀬湊も重要であるが、中世後期の岩瀬湊については不明な所が多い。よく知られているように寛文期に神通川の流路が大きく変わり、東岩瀬が神通川の川湊として発展していくことになった。寛文期に東岩瀬に住民が移転したとされているが⁽²⁷⁾、富山藩領の年貢・役銀負担者が勝手に他藩の加賀藩領へ移転するのも限度があり、家持層の移動は次三男移住や店舗利用のみとみられる。寛文7年の家数は163軒であるが⁽²⁸⁾、中世後期の西岩瀬もこの家数とそう変わらない規模の湊町であったとみられる。

中世後期の飛騨への物資は、この湊町岩瀬だけ

でなく、放生津からも送り出されていたことが予想される。放生津から神通峡谷を経て飛騨への物資輸送は、下条川・鍛冶川の水運を使用し、黒河近辺の河岸場で荷揚げし、馬に積み替えて黒河から分岐する飛騨路を利用することが可能となるためである。この点を裏付けるのに、黒河へ中世後期に真宗寺院の専福寺が八尾より移転してきたことがある⁽²⁹⁾。この寺は瑞泉寺・聞名寺とともに天正13年(1585)に秀吉から制札を与えられた有力寺院であった⁽³⁰⁾。この制札に専福寺内の百姓・町人を記載しており、当時同寺は町人も居住する寺内を形成していたことがわかる。中世末の黒河は、こうした寺院が移転してくるほど経済的に重要な土地になっていたとみられる。

さて、「戸山」・黒川記載も含めて、以上からすると、原図はやはり近世初期の天正14年から慶長14年の間の越中を描いていたとみなしうる。

2. 佐賀県立図書館蔵日本図

佐賀県立図書館図は蓮池藩鍋島家が所蔵していた蓮池文庫の日本図(中部384×279センチ)である。これは幸いにも、現物を拝見させていただき、北陸地域とその周辺の写真(写真1参照)を撮らせていただいている。

この日本図は街道描写が国会図書館図より詳しくなっている。前項掲載の図イに示したように、これも十二町瀉のみ記載されている。

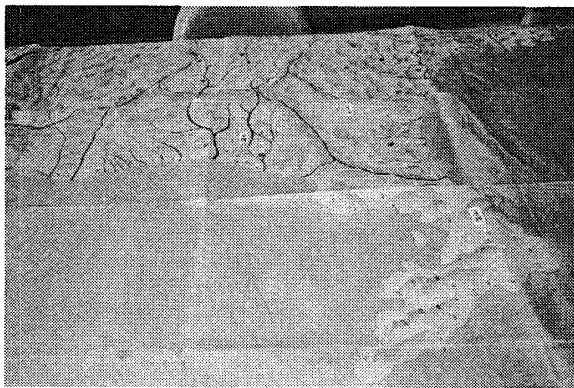


写真1 佐賀県立図書館蔵日本図

主要な街道と町名だけを下に整理する。なお、同図と同系統の山口県文書館蔵毛利文庫の日本図(中部374×292センチ)⁽³¹⁾は()内に記載する。○「はにう」(「ハニウ」)―「今ゆするき」(「今ユスルキ」)―「新町」(同)―「黒川」(同)―「戸山」<□で

囲む>(「富山」<同赤塗り>)―「高月」(同)―「魚つ」(「魚津」)―「新町」(同)―「堺町」(同)―[越後](同)

○「高岡」<□で囲む>(同赤塗り)―「森山」(同)―「水上」(「水見」)―[能登]

○「黒川」(同)―「城の尾」(「城野尾」)―杉原・高山

○「高岡」(同)―「新町」(同)―「石丸」(同)―「中野」(同)―「城かはな」(城カハナ)―「赤尾」(同)

○「今ゆするき」(「今ユスルキ」)―「安井」(同)―「福光」(同)―「小俣」(同)―[加賀](同)

○「戸山」(「富山」)―「長戸」(同)―杉原・高山

○「戸山」(「富山」)―「うれ」(ウレ)

この絵図には高岡が描かれ、しかも富山と同様に□で囲む城下町の扱いがされている。高岡が城下町であったのは、建設された慶長14年から一国一城令の元和元年までである⁽³²⁾。

国会図書館図に重要地点として記載されていた守山は、「森山」として記載されている。利長による富山建設後にも守山には町人が残っていたが、高岡建設後にほとんど高岡へ移転したと考えられ、その後の守山は能登路の宿場町となっていた。なお、富山はこの絵図でも「戸山」記載となっていた。

北陸街道の今石動―黒河間に新町が記載されているが、新町(戸出新町)が成立したのは元和3年のことであった⁽³³⁾。前で省略した今石動―福光間の街道筋にある安居(「安井」)も元和2年に町立てされている⁽³⁴⁾。つまり、この点からすると元和期に下る内容ということになる。

街道筋をみると、北陸街道の飛騨路への分岐点は富山ではなく、ここでも黒河となっている。高岡建設以降に富山城は破却されずにそのまま温存され、町人もある程度居住して、それなりの町として存続はしていた⁽³⁵⁾。しかし、富山が城下町として重要性を再び帯びてくるのは寛永16年に富山藩が成立してからである。この結果、富山から黒河を経由しない飛騨街道ではなく、西からの道をも考慮した黒河からのルートが飛騨への交通路として捉えられたのであろう。

以上のように、古い形態を示すといわれるこの

絵図もその記載内容では、越中は国会図書館図よりも新しい記載であった。高岡・戸出・安居の記載からすると、元和以降の内容となる。しかし、佐賀県立図書館図・山口県立図書館図の作成年代とされている寛永10年を下ることはない。

3. 南波氏蔵日本図と下郷氏所蔵日本図・秋岡氏旧蔵日本図

この個人所蔵の著名な絵図は当然ながら現物を見ることなどできない。しかし、幸いにも『日本の古地図』と『日本古地図大成』⁽³⁶⁾に図版が収録されているのでこれを使用する。

南波氏蔵日本図(56×124センチ)は、はしがきで記したように佐賀県立図書館図と同系統図とされている。「越中の図形」の図ウを見ると、やはり十二町瀉図のみが描写され、その形は佐賀県立図書館図と同様であって、国会図書館図とは若干異なる。

街道と町村の地名は次の通りである。

- (金沢, 城所の赤色□)－高岡(城所の赤色□)－(黒川無記載)－富山(城所の赤色□)－(越後)
- (能登)－高岡
- (黒川無記載)－(高山, 赤色□)

南波図には高岡が城所として記載されている。この点、佐賀県立図書館図とやはり対応する。ただ街道筋の重要な分岐点として黒川の位置が記されている。加賀は小松・大聖寺記載はないので、この絵図は高岡建設から廃城までの慶長14年から元和元年の状況を示すことになる。

次に、塚本氏が第2類型とした二つの絵図を見ておきたい。下郷氏所蔵日本図(104×265センチ, 図エ)と秋岡氏旧蔵日本図(56×124センチ, 図オ)であるが、この越中の図形は海岸線をギザギザにしている点の特徴がある。しかし、瀉記載がなく、ともにこれまで取り上げた日本図と異なる。

下郷氏所蔵日本図であるが、これに記載された主要地名を交通路ごとに示すと次の通りである。

- (七尾)－「黒川」－「と山」－(越後)
- (金沢)－「黒川」－「と山」
- 「黒川」－(飛騨高山)

秋岡氏蔵日本図は街道筋の記載がなく、地名だけであるが、この地名は次の土地である。

- 富山(城所の赤□)・「黒川」・「鳥山」

下郷図は黒川以西には越中の地名記載はない。黒川が飛騨との分岐点として記載されているので初期のものとなる。また、七尾と金沢への街道分岐点は国会図書館図と異なり黒川からとなっている。これは国会図書館図より簡略な記載のためとみられる。次に越中の地名には城所としての記号はないが、富山のところには大名名前の貼り付けがある。守山・高岡の記載がないので、守山から前田利長が富山へ移った慶長2年⁽³⁷⁾から高岡建設の同14年の間の状況となる。

ところが、加賀には小松が城所として記載されており、富山には前記の張り紙があるので、小松城が建設され富山藩が分藩された、三代目藩主利常隠居の寛永16年以降の状況となる。しかし、この小松記載をよく見ると、本来は北陸街道沿いなのに、北陸街道をはずして記載されている。これは本図作成の際に、原図に対して作成時の状況を書き加える必要があり、街道をはずして書き加えたことを示すものである。つまり、原図は少なくとも越中とその隣接の小松に限って言えば、慶長2年から同14年の間の作成となる。

秋岡図は高岡の記載がなく守山が記されている。しかも「鳥山」の記載間違いであり、それは原図にあった地名の写し間違いということになる。加賀には小松・大聖寺が城所として記載されている。これは下郷図のように原図に付記したものとなり、原図は高岡成立前の慶長14年以前のものとなる。

図形が同じで同類型に分類されているこれらの同系統図とされる図は、その原図成立が内容からすると慶長2年から同14年の成立にふさわしい。

はしがきで触れておいたように、海道氏はこの下郷図などの日本図は、肥前の島嶼記載からすると文禄・慶長役の頃のものとしていたが、越中でもほぼ同様であったことになる。ただし、図形については後の国絵図分析で考える点がまだ残されていることについて予め記しておく。

二. 初期越中国絵図

日本惣図の越中の記載について見てきた。その記載がいつの国絵図をもとにしていたかを考えるために、次に現存する初期国絵図からうかがうこ

とにする。

加賀藩が延宝5年(1677)に所蔵する国絵図を調査した際に、次の国絵図が存在した⁽³⁸⁾。

- 1, 寛永10年の国絵図控・巡見使へ提出
- 2, 寛永19年の国絵図控(場合によっては寛永16年から同19年までの作成)
- 3, 正保3年の国絵図伺図

3は金沢市立多摩川図書館に現存しているが、1と2は現存していない。しかし、1の寛永国絵図の簡略図とされる絵図は多数現存している(秋田県立公文書館・国会図書館・富山県立図書館他)。また、2の図の写とみられる絵図が南葵文庫に架蔵されている⁽³⁹⁾。ここではまずこの二つの図の越中の国絵図を対象に見てみることにする。

1, 寛永10年国絵図

川村氏により寛永10年図とされた国絵図写は各所に所蔵されている。ここでは、氏により近年注目されている佐竹文庫所蔵の「日本六十余州国々切絵図」(75×92センチ、写真2参照)⁽⁴⁰⁾と同じ原図写の国立公文書館内閣文庫蔵の「越中国図」(73×92センチ)を見ることにし、先の図形のところで後者より図を作成した。

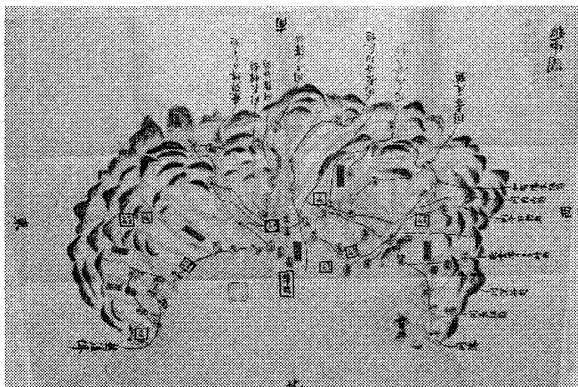


写真2 佐竹文庫所蔵日本図

「日本六十余州国々切絵図」の越中図は写真ではわかりにくい、川を河口に重点を置いて詳しく描く特徴があり、このために海岸線がギザギザ状態になる。内閣文庫の図も当然に川を同様に描くものの、これはそれほどギザギザとはならない。「日本六十余州国々切絵図」の海岸線を持つ各国の図は同様に川・半島などの存在から、これをもとに海岸線を図示するとギザギザにならざるをえ

ない。先に取り上げた下郷氏の海岸線がギザギザであるのは、詳しい川・河口の表現に基づくものとみられる。

この寛永の国絵図の場合、やはり潟として十二町潟を描くだけで放生津潟を欠いている。国の形は下郷図に似ているが、前記のように下郷図には潟がないので、寛永図との関係を結び付けられない。他方、佐賀県立図書館図や国会図書館図と図形は異なっている。

地名と交通路を整理してみる。〈〉は内閣文庫図である。

- 「恒生」〈同〉-「記載欠落」〈今石動〉-〈街道記載なし〉-「新町」-「黒川」〈三戸田〉-「富山町・城」〈同〉-「高月」〈高月〉-「魚津・古城」〈同〉-「荒町」〈同〉-「堺町」〈同〉- (越後)
- 「高岡古城」〈同〉-「守山町」〈同〉-「氷見町」〈水石町〉- (能登)
- 「高岡」〈同〉-〈街道記載なし〉-「新町」〈同〉-〈街道記載なし〉-「中野」〈同〉-「井波」〈同〉-「城鼻」〈同〉- (赤尾越)
- 「三戸田」-「八尾」-「切詰」- (切詰越)
- 「欠」〈今石動〉-「安居」〈同〉-「福光」〈同〉- (加賀木坂越)
- 「富山町・城」〈同〉-「小黑」〈同〉-「牛ヶ増」〈手カ増〉-「猪谷」〈同〉- (猪谷越)
- 「富山町」〈同〉-「長棟」〈同〉- (長棟越)
- 「富山町」〈同〉-「有峰」〈同〉- (ウレイ越)

まず、城の所在からふれると、高岡・魚津が古城記載で、富山に城が記載されているので、一国一城令後の絵図であることは間違いない。注目されるのは、北陸街道で埴生・今石動と黒川間の新町記載の他に、魚津・境間にも新町に対応する荒町記載があることである。この新町は北陸街道に面した石田新町村⁽⁴¹⁾のこととみられる。また、高岡・守山の街道記載もあり、この両街道は佐賀県立図書館図に対応する。ただし、飛騨への道筋は富山からとなっており、佐賀県立図書館図と異なる。しかし、城端への道筋は対応している。

以上のように、寛永10年の国絵図を簡略にしたとされているこの絵図は、佐賀県立図書館図に近い。しかし、飛騨への道筋は異なっている。これ

をどう解釈したらよいのか。1, 簡略図にされた際に、富山から飛騨への道筋へ書き改められたのであろうか。2, それとも加賀藩から提出された元図通りなのであろうか。3, さらに、佐賀県立図書館図が作成された際に誤って、黒河・高山間に改められたのであろうか。川村氏によると、直接には国絵図ではなく、広域図をもとにして作成されているとするので⁽⁴²⁾、広域図作成の際に訂正が考えられる。

2. 南葵文庫所蔵図

南葵文庫のこの国絵図「越中国図」(217×346センチ)⁽⁴³⁾は、慶長系国絵図として把握されている絵図で、その写が作成された時点は下としても、この絵図の元図が寛永16年より19年の間の提出とみられるもので⁽⁴⁴⁾、しかもその内容からその原図は慶長国絵図を元にした可能性のある絵図である⁽⁴⁵⁾。

この絵図は、越中最大の瀧である放生津瀧を描写せずに、大きく描かないけれども十二町瀧を描写している特徴があった。これは前記のように国会図書館図、佐賀県立図書館図の特徴でもあった。越中の形は特に越後・信濃境が明確に描かれていないのでわかりにくいだが、ここを先に示した図、越中図形では破線で示した。この越中の形は、瀧記載のない下郷氏蔵日本図が一番近い。そして、佐賀県立図書館図よりは国会図書館図の方が形は近い。

この国絵図は道筋記載が極めて詳しく、しかもアトランダムな形で村から村への道がみな記載されている。このためどの道が主要道か判定しにくいだが、主要な町間の道筋を追いかけて、それを捉えてみると次のようになる。

- (金沢-森山)-今石動-守山-(能登)
- 「殖生」-「今石動町」-「戸出村」-「三段田」-「黒河」-「富山」-「水橋渡」-「高槻」-「魚津町」-「田荒町」-「春日」-「境村」-(越後)
- 「守山町」-「伏木」-「北市氷見町」-「南市氷見町」
- 「守山町」-「戸出村」
- 富山-「五福町」-「猪谷村」-「かか沢」

この絵図は、街道筋記載は極めて詳細で、また国絵図のため当然に地名記載は詳しい。それゆえ

極めて概略的な日本図との対照は残念ながら難しい。しかし、前記の瀧記載が国会図書館図・佐賀県立図書館図にもみられ、特に前者の原図を引き継いでいるのか興味深い。残念ながらわからない。

3. 「日本分形図」

最後に、幕府へ提出の国絵図ではないが、国会図書館図と関連するとされる国絵図の「日本分形図」の越中図についてもふれておきたい。

この分形図ははしがきで記したように国会図書館図・慶長日本図をもとにした絵図とされている。ここでは翻刻されている絵図⁽⁴⁶⁾を使用する。この絵図は、「越中の図形」図カのように放生津瀧を略して十二町瀧を描写する点で国会図書館図と同様である。越中の図形も変わらない。

街道は飛騨への街道を略していることを除けばほとんど国会図書館図と同じである。その越中図の地名は次のものである。

- 「いまゆき」-「黒川」-「戸山」-「魚津」-「堺町」-(越後)
- 「いまゆき」-「鳥山」-(能登七尾)
- 「黒川」-「鳥山」
- 「黒川」(高山へ二三里の記載あり)

上には高岡が記載されず「鳥山」つまり守山が記載されている。鳥山記載ということは、原図に守山記載があったことを示す。この他の地名や富山を戸山と記載する点など国会図書館図とやはり同じである。

おわりに

越中は、初期に城下町の変更有り、またそれにとともなう中心的交通路の変遷もあった国である。このため初期日本図の原図の成立時期を検討するうえで重要な地域となる。幕府が作成した日本図を確定し、またこれらの初期日本図とその原図の作成時期を確定することが重要なために、本稿では越中を対象にして同絵図の地名と交通路記載を主にして、越中の図形もあわせて検討をした。

検討の結果、国会図書館図は天正14年(1586)から慶長14年(1609)の間の越中を描写している

ことが明らかとなった。海野氏は、讃岐国丸亀、常陸国土浦、肥前国名護屋の城所在地名を主にして慶長3年から同6年に原図が作成されたとするが、この見解は越中の記載からも裏付けられることになる。しかし、潟描写の点で放生津潟が描かれずに十二町潟（布施湖）のみが描写されるという問題点が見出された。これについては後にまたふれる。なお、国会図書館図・慶長日本図をもとにしたとされている「日本分形図」についても見てみたが、越中は国会図書館図と同内容記載で、しかも十二町潟のみの描写で図形が同じであり、通説の見解は越中でも裏付けられ、これは問題ない。

海岸線をギザギザにする特徴のある下郷氏所蔵図などの系統日本図原図は、肥前に島嶼記載が多い事からその内容は文禄・慶長の役の頃ではないかと推定されていたが、越中の記載もその内容から原図は国会図書館図と同様な時期に遡りうるものであった。しかし、その越中の図形はやはり海岸線がギザギザで、寛永10年図を基にした「日本六十余州国々切絵図」のように川とその河口記載を詳しくする絵図に依拠するとこのような図になる。もっとも十二町潟を欠いている点から図形を寛永図に依拠したと結論できない。ただし、慶長系越中国絵図は詳しく川の河口も描くので、もしこれに「日本六十余州国々切絵図」のような図が作成されてこれを基にすれば、下郷図のような海岸線となるが、いずれにしても今後さらに検討しなければならない。

次に作成が国会図書館図の実際の作成よりも早い寛永10年（1633）の幕府撰日本図とされている佐賀県立図書館蔵蓮池文庫図・山口県文書館毛利文庫図の内容を見た。これらの越中の記載は国会図書館図よりも遅い元和以降の内容である。その図形は十二町潟の描写があるものの、越中図の形は国会図書館図・日本分形図と異なるものであった。

佐賀県立図書館図と異なり、国会図書館図・下郷図は内容が簡略すぎて、慶長系国絵図との比較が難しい。しかし、この佐賀県立図書館図の原図は寛永10年に幕府が作成した日本図ということで問題ないようである。

以上のように図形では、初期日本図は下郷・秋岡両氏蔵日本図の系統図と国会図書館図（「日本分形図」も）・佐賀県立図書館図・南波氏蔵日本図に分かれたが、後者も十二町潟図描写で共通するものの、越中国の形から、国会図書館図と佐賀県立図書館図・南波氏蔵日本図は区分された。放生津潟が描写されない越中の国絵図は南葵文庫の「越中国図」など慶長系国絵図にみられる特徴であるが、この特徴は正保の越中国絵図にもほぼ継承されており、正保の国絵図をほぼ引継いだ元禄の国絵図にも受け継がれている。ほぼとするのは、放生津潟がごく小さな潟があるかないかのような描写となっているためである。このような放生津潟の初期越中国絵図の加賀藩による提出は徳川政権に対しての軍事的観点から生まれたものとみられる⁽⁴⁷⁾。

問題は、放生津潟を省くことが、前代の豊臣政権の郡図徴収でも見られたかという点である。郡図ということになると射水郡（中郡）でも非常に大きな放生津潟を省略するわけには絶対にかない地理的問題が生じてしまう。豊臣政権と前田家ということであれば、なにもかも秘匿する関係ではない。つまり郡図では放生津潟も十二町潟もともに描写され、もしこの郡図をもとにした日本図が作成されれば、潟をまったく描かない絵図か、越中で潟を描けば放生津潟も描写されたものとなる。

これまで見たところによれば国会図書館図・佐賀県立図書館図の原図は、図形としては豊臣期のものでなく徳川政権期のものを参考に行っていることになる。寛永15年に再提出が命じられていない石見国の慶長国絵図から佐賀県立図書館図が慶長国絵図の図形を基に行っていること、ただし国会図書館図の図形は慶長国絵図に基づいていないと海野氏は指摘し、さらに国会図書館図は豊臣期の絵図に依拠したと海野氏は論じているが、慶長石見国絵図の中央部海岸線の曲がり具合が国会図のようになだらかでない点からいきなり慶長国絵図に依拠していないとの結論となっている⁽⁴⁸⁾。しかし、慶長国絵図を基にして広域図ないし日本図が作成されたとするならば、当然にその海岸線の曲直の度合いは変化し、この広域図ないし日本図を

基にしても国会図書館図が作成されれば慶長国絵図の海岸線の曲がり具合は違って当然である。曲直などでなく地形のある無しであれば決定的な論拠となるが、この説はそうではなかった。

幸いにも越中は渦の有無という問題を抱えた。もし国会図書館図に下郷図のように渦がまったく描写されていないか、あるいは二つの渦が描写されていれば、海野氏が考えるように国会図書館図は図形も豊臣期のものと考えより所となる。慶長石見国図をもとに佐賀県立図書館図の図形が描画されたように、越中国でも同様に慶長国絵図にみられる十二町渦のみの描画となった。そして、国会図書館図も十二町渦のみの描画であるが、これは渦も含めて図形が違っているので、図形は別の図に依拠したことになる。慶長国絵図と別の絵図は当然に豊臣期のものではなく、佐賀県立図書館図の原図でもない。また、海野氏は備前の寛永16年図をもとにして国会図書館図が作成されたとする川村説も否定しているので、慶長国絵図をもとにして作られた広域図ないし日本図の可能性も出てくるのではなからうか。慶長国絵図の提出により日本図が編成されたとする史料は見いだされていないが、今後さらに調べる必要がある。

図形だけでなく、地名に加えて交通路も問題であった。この地名・交通路記載を下郷図・秋岡図の原図は守山・黒川を記載し、黒川が交通路の中心である点で慶長期の内容にふさわしい。この点、国会図書館図も佐賀県立図書館図も同様であるものの、佐賀県立図書館図は同絵図描画時期の地名をも加えていたのに対して、国会図書館図の越中の地名は新たに成立した町名などは加えずに、基にした絵図に従い、描画年代をはるかにさかのぼる時期の地名内容となった。この国会図書館図に対して海野氏は、はしがきで記したように他の国での慶長前期の地名記載を複数見出されていた。

交通路・地名記載は図形と異なって古い豊臣期にさかのぼるものであるが、これまでみた図形の点や所蔵関係、仕立てなどからも、国会図書館図は通説のように幕府作成のもので民間図ではない。幕府関係者が作成したと判断できるこの国会図書館図が豊臣期の地名記載をもとにした図を利用したとするならば、それはこの日本図作成の担当者

(幕府)か絵師が豊臣期の日本図を所持ないし入手しており、それも参考にしたためということになる。

先に図形では慶長国絵図をもとにした広域図・日本図を原図と考え、地名・交通路では豊臣期の日本図を考えるというように複数の図を原図に考慮してみた。とはいえ、国会図書館の原図の判定は難しく、いうまでもなく今後さらに史料を発掘して考えなければならない。

なお、佐賀県立図書館図・山口県文書館図など⁽⁴⁹⁾の存在は、絵師・工房が大名などの依頼に応じて日本図を作成して販売したことを示す。幕府の国絵図は御用絵師が当然に参画するので、寛永であれば京都・大坂の絵師ではなく、江戸の絵師が作成に関わる。彼らの下には、日本図作成の下図や控図、また国絵図の写ほかが残っているので、この関係の絵師の流れの所から佐賀県立図書館図系の絵図は作成・販売されたとみられる。

注

1. 川村「江戸幕府撰日本図の編成について」『人文地理』33巻6号・1981年、同「江戸初期日本総図再考」『人文地理』50巻5号・1998年、同「池田家文庫所蔵の寛永日本図について」『地図』36巻1号・1998年
2. 黒田日出男「寛永江戸幕府国絵図小考」『史観』107号・1982年、塚本桂大「江戸時代初期の日本図」『神戸市立博物館研究紀要』2号・1985年
3. 海野「いわゆる『慶長日本総図』の源流」『地図』38巻1号・2000年、同「図形成立年代と描画年代」『地図』39巻1号・2001年、海野「寛永年間における幕府の行政査察および地図調整事業」『地図』39巻2号・2001年
- 4・7. 川村博忠「江戸初期日本総図をめぐって—海野氏の見解に依って」『地図』38巻4号・2000年
- 5・6. 注3、海野「図形成立年代と描画年代」『地図』39巻1号、同「寛永年間における幕府の行政査察および地図調整事業」
- 8・12. 注3、海野「寛永年間における幕府の行

- 政査察および地図調整事業」
- 9, 注2, 塚本「江戸時代初期の日本図」
- 10, 海道静香「山本氏蔵日本図屏風について」『福井県史研究』3号・1986年
- 11, 南波氏所蔵日本図と秋岡氏旧蔵日本図は南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』（創元社・1969年）所収の図版，下郷氏所蔵日本図は中村拓『日本古地図大成』（講談社・1974年）を利用し，解説も参照した。
- 13, 横山重監修『人国記・日本分形図』（勉誠社・昭和53年）
- 14, 拙稿「国絵図に読む湊町と交通」（高沢祐一他編『前田氏と加賀藩』高志書院・近日常行）
- 15, 芦田伊人「日本総図の沿革」，織田武雄「幕府撰寛永日本図」『古地図散歩』（朝日新聞社）。前出海野「いわゆる『慶長日本総図』の源流」。他。
- 16, 「寛永日記」他『加賀藩史料』二編（清文堂出版・1981年版），寛永16年6月20日条
- 17, 「諸家所蔵文書写」同上・第二編，慶長14年8月26日条
- 18, 「袂草」他，右同・一編，天正13年9月11日条
- 19, 同上，『高岡市史』上巻650頁。「守山城」『日本城郭大系』7巻（新人物往来社・1980）。守山城下の実態はよくわかっていない。
- 20, 「今石動町」『富山県の地名』平凡社・1994年
- 21, 寛文10年「越中国高物成帳」加越能文庫蔵
- 22, 「富山町」前出『富山県の地名』
- 23, 深井「加賀藩御郡所町，小杉新町（小杉宿）の町立てと地縁的結合」（丸山雍成編『日本近世の地域社会論』（文献出版・1998年）
- 24, 「三ヶ国宿々伝馬役之定」『富山県史』資料編近世中巻・640号文書
- 25・35, 深井『近世の地方都市と町人』吉川弘文館・1995年，2章3節
- 26, 「放生津」前出『富山県の地名』参照
- 27, 『東岩瀬史料』（東岩瀬史料保存会・1933年）24頁
- 28, 富山市大場家文書
- 29, 井上鋭夫校訂『加越能寺社由来』（日本海文化研究室・1974年）上巻
- 30, 「松雲公遺編類纂」『富山県史』資料編近世上・139号
- 31, 川村博忠編『江戸幕府撰慶長国絵図集成』（柏書房・2000年）に写真が収録されており，これを参考にした。
- 32, 『高岡市史』中巻（1959年）は「高岡城と城下町」で廃城時期について諸史料より詳しく検討し，一国一城令の時としている。
- 33, 「立野町方之儀旧記」『富山県史』資料編近世中巻・13号
- 34, 「中越史料カード」『富山県史』資料編近世中巻・12号
- 36, これらの図の寸法その他は前出，南波松太郎他編『日本の古地図』の解説による。
- 37, 「三州史」他『富山市史』第一，慶長2年10月条
- 38, 「御国絵図公儀江被上候写其外品々絵図御算用場土蔵ニ有之分之帳」外，加越能文庫蔵
- 39, 東京大学総合図書館蔵。この図の詳しいことは拙著「国絵図に読む湊町と交通」（前出『前田氏と加賀藩』
- 40, 秋田県立文書館蔵。川村氏が本絵図を柏書房より翻刻している。川村博忠氏編『寛永十年巡見使国絵図・日本六十余州図』2002年）同書を参照されたい。
- 41, 「石田新町村」『日本歴史地名大系16，富山県の地名』174・175頁。この村の成立についての詳しいことは不明である。
- 42, 注1, 川村「江戸初期日本総図再考」『人文地理』50巻5号
- 43, 東京大学附属総合図書館蔵。この南葵文庫の国絵図には全国の慶長系国絵図が含まれており，越中などの国絵図も同様であることは，川村博忠「国絵図」（『金沢市史』資料編18，解題）・黒田日出男「南葵文庫の江戸幕府国絵図(5)(10)(11)」『東大史料編纂所付属画像史料解析センター通信』5号・10号・11号参照。
- 44・45, 注14, 拙稿前出「国絵図に読む湊町と交通」
- 46, 横山重監修『近世文学資料類従・古板地誌編』22巻，昭和53年
- 47, この点は拙稿「国絵図に読む湊町と交通」（注14参照）。なお，射水郡の代表的潟の放生津

瀉に加え、同瀉以東にあった放生津瀉よりも小さい足洗瀉や西岩瀬の海側に貞享期まであった瀉も描写されていない。なぜ、十二町瀉が描写されたかという点は、越中でも越後から最も離れた西部に属した、能登付け根にある大きな瀉であったことや、また万葉集の大伴家持の歌で著名なために省きにくかった点が考えられる。

48, 注3 海野「寛永年間における幕府の行政査察および地図調整事業」参照

49, 岡山大学附属図書館蔵池田文庫の日本図などもある。この絵図については川村「江戸初期日本総図再考」(注1参照)参照。

追記, 石川県立図書館ほかで能登などの慶長系国絵図を新たに見ることができたので、能登・加賀の国絵図についての検討も今後行い、さらに初期日本図について考えてみたい。なお、南葵文集の「越中国図」の写真の本論文を掲載するために、東京大学総合図書館に掲載願いを出し、写真撮影を同館に常駐する業者に昨春依頼したが、大型図のためもあり、撮影が困難とみえて、写真を入手できなかった。このため重要な同絵図写真を掲載できなかったことを断っておきたい。